下関市立熊野小学校

平成２５年度授業づくり拠点校（活用力研究事業）実践事例

指導者　　長廻　修

Ⅰ　学習指導案

第６学年　国語科学習指導案

１　単元名　　「持続可能な社会」への取組について調べよう　未来に生かす自然のエネルギー

２　指導の立場

○　全国学力・学習状況調査における児童質問紙Ⅰの集計結果の一部から児童の傾向を分析する。「学習材を自ら評価することのできる子ども（活用力を身に付けた子どもの具体像）」をめざす上で特に関係の深いものを２つ挙げる。

まず、質問番号（２２）「１カ月に、何冊くらい本を読みますか。」（教科書や参考書、漫画や雑誌除く）の質問に対して、「１冊も読まない」と回答した児童が、本校６年生には 20.5%（全国：11.5%　差：＋9%）いることが明らかになった。これは、５人に１人いる割合であり、クラスにも６人程度いることが予想される。この結果は、４月、国語の授業で音読をさせた時、すらすら読み進められない子どもがいる事実と重なる。一人ずつ句点（。）で交代しながら音読をさせるだけでずいぶん時間がかかっていたのだ。まず、みんなの読むスピードと同じように活字を目で追うことができていない。そのため、自分が読む番になった時、どこから読み始めていいのか分からず、すっと自信をもって読み始められない状態であった。当然リズムも悪くなる。その上、読み始めたのはいいが、熟語に出会うたびに立ち止まってしまう。範読では何度か聞いていても、その熟語の読み方が分からず、つまりながら読み進めるような様子が見られた。これは、先の 20.5%の子どもたちのように、活字に触れる機会が極端に少ないことが原因の一つと考えられる。

また、質問番号（５０）「普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。」の質問に対して、「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と回答した児童が、40.4%（全国：20.6%　差：＋19.8%）いることが明らかになった。実際の授業場面を思い浮かべると、話し合い活動を取り入れることなく進んでいく授業も確かにあると思われるが、ほとんどの場合、意見を交流する場が設けられ、話し合い活動が行われていると考える。それにも関わらず、回答結果にあるように40%以上の子どもたちが「話し合う活動を行ってない」と答えるのは、国語の授業で考えた場合、高学年になり、たくさんのページに渡って記された学習材を読み取れていない子どもが多く、授業に参加できずにいることが原因の１つではないかと考えられる。あるいは、実際には多くの子どもたちが話し合い活動に参加しているものの、その話し合いを通して、「分かった」「できた」という実感が得られないまま終えることが多いことが原因ではないかと考えられる。

○　環境問題が叫ばれる中、「こまめに電気を消す」等、環境のために実践している児童は

多い。しかし、東日本大震災を経験した後であっても、エネルギー問題の切実な現状は実感できていないと考えられる。本学習材を学ぶことを通して、今のエネルギー問題の実態を理解し、「持続可能な社会」の実現のために、未来を担う者として何をすべきなのかを必然的に考える良いきっかけとなると考える。

本学習材「未来に生かす自然のエネルギー」は、11ページにも及ぶ長編の説明文である。「浪費」「認識」「直面」など、抽象的な言葉をふんだんに用いて書き表されており、本学級の子どもたちにとって、簡単に理解できる内容ではないと考える。しかし、読み取る上で抵抗がある内容であるがゆえに、何度も読んで理解する必要性が生まれると同時に、子どもによって読み取り方のズレが生まれやすいと考える。そのため、話し合い活動を通して、読み取り方のズレを修正しながら深く読み進んでいく展開に適した学習材である。

文章構成は、「話題提示」→「現状」→「課題」→「解決策」（話題提示を兼ねる）→「現状」→「課題」→「解決策」→「結論」のように、「現状」「課題」「解決策」が繰り返された、読み手に伝わりやすい構成になっている。また、エネルギー問題という大きく広いテーマから始まり、具体的な風エネルギーへ焦点化され、最終的には、自分たちの工夫や知恵の大切さでまとめられている。これは、どんな大きな問題も小さなことから一つひとつ解決していけば、いつかその努力が実るというメッセージを感じさせる。さらに、山形県立川町の「清川だし」の具体例は、長い間、凶風とまで言われ人々を悩ませてきたものを、まさに人間の工夫と知恵によって有効活用できるように変身させた実践例であり、筆者の主張をより強める役割を果たしていると考える。

また、文末表現に着目すると、話題提示の場面では、「エネルギー問題の解決がどうしても必要です。」（P31、L8）また、本論２では、「しかし、解決策がないわけではありません。」（P39、L6）さらに、結論では、「転機にさしかかっていると思わざるをえません。」（P40、L2）「それがわたしたちの使命であり、義務なのです。」（P40、L6）など、強調されたもの、あるいは、曖昧さを感じさせるもの等、特別な表現がされており、筆者の主張を読み取り易い工夫が見られる。

○　そこで、指導にあたっては、次のことに留意したい。

まず、読書習慣が培われていない児童に少しでも活字に触れる機会を増やすために、音読を必ずさせるようにする。何度も声に出して読んだり、友達が読むのを聞いたりすることは、学習材の理解を助け、難しい熟語等の読み方や使い方に慣れることにつながると考える。そこで、授業における【出会う】場面では、学習材の音読に取り組む。一人ずつ声に出して順に読むことを大切にしながら、一斉あるいはチームで交代しながら繰り返し読んでいく。教科書を広げずに、説明文の内容を紹介できるようになるくらい読むことを目標にして取り組む。

次に、「話し合う活動を行ってない」と答える児童の意識を変えるために授業における【深める】【広げる】場面では、次の３つのてだてを加える。

①二者択一あるいは比べて考える問いを与える

『エネルギー問題の解決が「Ａどうしても必要です。」「Ｂどうしても必要と思われます。」のどちらが合っているだろうか？』このように尋ねると、自信はなくとも、全員の子どもがＡかＢのどちらかを選ぶことができると考える。これは、二択なので、自

分だけが間違うという恐れは低いと考えられるからだ。そうして、どちらかを選んだら次は理由を探して、自分の考えをつくる作業（立論）に取り組む。ＡあるいはＢの根拠になる材料を探すという目的をもって学習材を読み返していく。自分の立場をどちらか一方に決めるからこそ、相手を説得しようとする意識が高まるものと考える。

②グループで話し合う

クラス全体での話し合いでは、一部の子どもが活躍し、その子たちの意見だけで話し合いが進んでいく場面も多く見られる。これは、話し合いに使える時間が限られていることが影響しており、仕方のないことでもある。そこで、自分から意見を発信する機会を確保するためにグループでの話し合いを取り入れるようにしている。ノートにまとめた自分の考えを述べ合ったり、友達の考えの分からない部分に質問を加えたりして、問いについて理解を深める場としている。また、一人で立論できない子どもにとっては、グループ内で友達に手伝ってもらいながら意見をまとめることもできるため、相談の場にもなっている。

③高めるてだてと収束の仕方

全体での話し合いではたくさんの意見が行き交う。ただ、意見を述べ合うだけの状態は、話し合いが這い回っている状態である。これでは、「分かった」「できた」という実感が得られないと考える。そこで、大切なのが、話し合いを高めるてだてと収束の仕方である。這い回った状態に新たな視点を与えたり、新たな視点が含まれる子どもの意見に着目させたりしてそれまでの状態を脱却させることが必要な場合がある。また、子どもの発した意見が鍵となり、全体の話し合いをくくり、学習が深まったと思わせて話し合いを収束させるのが理想の形である。この収束の仕方が「分かった」「できた」という実感を与えるのではないだろうか。そこで、指導者は、子どもたちの意見を予想し、分析しながら聞き、時には、小さな質問を加え、対話をしながら進めることが大切になる。また、ある時には、なるべく指導者は口を挟まず、子どもたちの自力解決をうながすことも大切になると考える。

３　単元の目標

○資料の示し方や具体例の挙げ方に注意して、筆者の意見を読み取る。

○筆者の資料の示し方や具体例の挙げ方を参考にして、エネルギー問題について文章にまとめることができる。

４　指導と評価の計画（全１０時間）

	ねらい（時数）	学習活動	主な評価規準
第一次①【出会う】	○学習材を通読し、学習の見通しをもつことができる。（1）	・「もし石油が無くなったら？」石油のない世界を想像し意見交流する。 ・疑問や感想を書く。 ・調べ学習の後、エコ作文にまとめるという見通しをもつ。	○意見交流と学習材の音読を通して、エネルギー問題の切実さを理解している。

第二次④【深める】	○話題提示の部分を読み、筆者の意図を読み取ることができる。 ①～③段落 （1）	・エネルギー問題の解決が「A どうしても必要です。」「B どうしても必要と思われます。」のどちらが合っているか話し合う。 ・振り返りを残す。	○本文の言葉を根拠に挙げながら「どうしても必要です」と言い切る筆者の思いを予想している。 ○相手の意見を聞いて、どう切り返して反論するか考えている。 ○学んだことを具体的にまとめている。
	○「清川だし」の風の向きについて話し合う活動を通して、筆者の意図を予想することができる。 ⑰～⑲段落（1）	・「清川だし」の向きは、日本海側からと内陸からのどちらが合っているか話し合う。 ・筆者は、なぜ「清川だし」を例に挙げたのか予想する。 ・振り返りを残す。	○本文の言葉を使い、地図を示しながら風の向きを説明している。 ○相手の意見を聞いて、自分の意見との違いを理解している。 ○学んだことを具体的にまとめている。
	○解決策に対する筆者の意図を予想することができる。⑳～㉓段落（1）	・「解決策が A ないわけではありません。B あります。」どちらが合っているか話し合う。 ・振り返りを残す。	○本文の言葉を根拠に挙げながらどちらが合っているかを述べている。 ○相手の意見を聞いて、どう切り返して反論するか考えている。 ○学んだことを具体的にまとめている。
	○結論部分の必要性を話し合う活動を通して、筆者の主張を読み取ることができる。 主に㉔～㉕段落（1） ≪本時≫	・㉔㉕段落は、必要かどうか話し合う。 ・振り返りを残す。	○本文の言葉を根拠に挙げながら結論部分が必要かどうか自分の考えを述べている。 ○相手の意見を聞いて、どう切り返して反論するか考えている。 ○学んだことを具体的にまとめている。
第三次④【広げる】	○自分のテーマを決め、資料を収集することができる。 （2）	・教科書のてびき（P.41～43）を参考にし、まとめる手順を確かめる。 ・テーマや調べ方を決め、いろいろな資料や情報を活用して調べる。	○テーマを決め、意欲的に調べている。 ○テーマに合わせて必要な材料を集めている。
	○資料の示し方や具体例の挙げ方を工夫して文章にまとめることができる。（2）	・構成メモをつくる。 ・資料や具体例を選ぶ。 ・書きまとめたものを推敲する。	○自分の意見が伝わるように資料の示し方や具体例の挙げ方を工夫してまとめている。
第四次①【まとめる】	○エネルギー問題に関する文章（エコ作文）を読み合い、感想や評価を伝え合うことができる。（1）	・文章を読み合い成果を交流する。 ・学習全体をふり返る。	○自分の考えの変化、知識の広がりや深まりについて理解している。

5　本時案　【本時（5／10）】

（1）主眼　結論部分の必要性について話し合う活動を通して、筆者の主張を読み取ることができる。

（2）学習の展開

展開	学習活動 （予想される児童の反応）	指導上の留意点（・）　評価（★） 努力を要する児童への支援（☆）
出会う 10	1　10月の名文の音読をする。 2　学習場面（㉔㉕段落）を音読し、意味調べをする。	・姿勢や声を揃えることに気を付けさせる。 ・「転機」「滅亡」など㉔㉕段落の熟語を調べることにより学習場面の内容を読み取りやすくする。
	㉔㉕段落は、必要なのだろうか？	
深める 10	3　㉔㉕段落は、必要かどうか話し合う。 ・自分の意見（立場）を決める ・意見と理由をノートにまとめる ・グループで相談する ・全体での意見交流 少数派→多数派 ・話し合う（質問、反対意見）	・「㉔㉕段落がなくても、筆者の伝えたいことは全て書かれているのではないか？」と投げかける。 ・意見を短くノートに書いてからグループで相談できるようにする。（書く２分→相談２分） ☆机間指導により、筆者の組み合わせ法でエネルギー問題を解決することができるかどうか質問し、その答えにより、「必要」「必要ない」の立場を決める。
広げる 23	**筆者の最も伝えたいこと** 「持続可能な社会」の実現は、自然の豊かなめぐみの一部を活用するというくふうや知恵から始まる。	・グループでは、一人ひとりが意見を述べたり、質問したり、書けていない友達を手伝ったりする活動を取り入れ、自分の考えをより明確にもてるようにする。 ・筆者の最も伝えたいこと（主張）は、どんなことなのかについて目を向けるよう指示する。 ・文末に着目した意見や「使命」「義務」等のキーワードに着目した意見、人間の「くふうや知恵」を代表する立川町の人々の例に着目した意見を取り上げて、筆者の伝えたいことを再び考える。 ★本文の言葉を根拠に挙げながら結論部分が必要かどうか自分の考えを述べている。
まとめる 2	4　もう一度自分の考えをノートにまとめる。 ・振り返りを残す。	★相手の意見を聞いて、どう切り返して反論するか考えている。 ・話し合いを経て、友達の意見を自分の考えに取り入れたり、違いを明確にもったりするよう助言する。 ☆「私は、必要であると思いました。」「今日は、筆者の主張はどんなものか分かりました。」等の書き出しを与える。 ★学んだことを具体的にまとめている。

Ⅱ　考察

(1) 本時の成果について

【出会う】場面では、「名文の音読」や「学習場面の音読」「言葉の意味調べ」に取り組

んだ。これは、毎時間授業の初めに取り組んでいる活動である。そのため、子どもたちは、最初の数分に行う活動を理解しており、安心して取り組むことができたと考える。さらに、慣れているため、最低限の指示で授業を進めることができ、研究協議では、リズムの良さを指摘する参観者の声が聞かれた。また、名文や国語辞典の意味を声に出して読ませることは、活字を目で追うトレーニングであり、長い学習材の読み取りにも大きく役立っていたと考えられる。

図１ 本時、グループでの相談の様子

【深める】【広げる】場面では、24名の子ども達が㉔㉕段落の必要性について意見を述べた。このように多くの子どもが意見を文章化してノートに記すことができた裏には、二者択一の問いであったこと、また、グループで話し合ったことが影響していると考える。しかも、出てきた意見の中には、『最後が「今後くふうされていくことでしょう」だったら、しっくりこない』『「実行することが求められています」と書いてあるので、㉔㉕段落が大切なメッセージだと思う』『㉔段落では、「もう 50 年後の未来に迫ってきている切実な問題」だと書いているから大切だ』等、文末表現やキーワードに着目した意見が多く聞かれた。後の協議では、「今までの学習を活かし、文章全体を見通した上で、㉔㉕段落の役割を考えた意見が聞かれたことに感心した」という意見が挙がった。しかし、今回の話し合いでは、全ての子どもが「㉔㉕段落は必要である」の立場になったため、児童相互の話し合いにならず、相手側に対する反論があまり聞かれなかった点が残念な点である。

(2) 単元全体を通しての成果について

学習材の読み取りを経て、エネルギー問題や節約に興味をもち、全ての子どもが次のような作文をまとめた。筆者の書き表し方を参考にした原稿用紙２～３枚の作文が集まった。

> ○**「エコと節約」**(前略)では、解決策について考えましょう。キーワードは、3R(スリーアール)です。3Rとは、Reduce リデュース Reuse リユース Recycle リサイクル。この3つのRで日本の資源を大切にし、リサイクルや節約をしていくことが今、私たちができることなのです。(後略)
>
> ○**「原発をやめ持続可能な社会をつくろう」**(前略)原子力発電は今、奇跡的に安全を保たれています。燃料棒を冷やすプールが壊れたり止まったりすれば、燃料棒が熱くなり、周りの金属を溶かして大爆発する現象、『メルトダウン』が起き、放射能が今よりもっと広い範囲に広がります。そう考えると、『原発は、あと25年くらいで直るそうだからいいだろう』なんて言っている場合ではありません。(後略)

(3) 昨年度との比較

今年度は、学校全体で校内研修の研究分野を国語科の『「説明的な文章」の授業づくり』にしぼり、授業の基本形を確立することをめざして取り組んできた。そこで、１０月に実施した学力定着状況確認問題の結果から、６年生国語科の結果は、評価Ｃであり、県平均と同等であることが分かった(資料1)。５年生時の結果は、評価Ｄであったため、伸びたことが分かる。この結果から、「活用力が高まった」と手放しで言うことはできないが、学校全体で試行錯誤しながら繰り返し取り組んできたことは、間違いではなかったことが明らかになった。今後も、より高い学力につながるよう、実態把握に努め、てだてを加え続けていきたいと思う。

A：+10%以上 B：+5～+10% C：±0～+5%
D：−5～±0% E：−10～−5% F：−10%以下

資料１ 平均との差を目安とした評価基準